平成29年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立大聖寺高等学校

重点目標	具体的取り組み	主担当	現　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善対策等)	備考
1 3年間を見通した進路指導体制の充実を図り、低学年からのキャリア教育を通して高い志を持たせ、生徒一人一人の進路実現を図る。	① 放課後補習を効果的に行い、大学入試に対応できる基礎学力定着と応用力養成を図る。	進路指導課 各教科 3年学年団	総体総文終了後、進学希望者全員が参加する形式で補習授業を実施している。できる限り習熟型の講座編成を行うことで、個々の生徒の学力向上を目指している。	【満足度指標(生徒)】 放課後補習は受験学習に効果的に作用している。	効果的に作用していると評価する生徒の割合が A　90%以上である。 B　85%以上である。 C　80%以上である。 D　80%未満である。	「役立っている」「どちらかといえば役立っている」の割合が 82.5% (第2回学習実態調査)	昨年度より5．4%減少したが、一定の水準は維持しており、習熟度や志望校に応じた補習への評価が定着してきていると認識している。今後も生徒の学力の実勢に応じた内容の補習を継続して行くことが必要だと思う。	昨年度は「役立っている」「どちらかといえば役立っている」の割合が 87.9% (第2回学習実態調査)
	② 「総合的な学習の時間」における大学・学部・学科研究等を通して、上級学校や職業について学び、高い志を持たせるように努め、生徒一人一人の進路実現に資する。	進路指導課 学年団 教務課	キャリア教育を推進することで、進路意識の高揚を図り、学習意欲向上につなげている。ホーム副担任を主担当としながら、担任の関与も増やすことで、より大きな効果が生まれるように努めている。	【満足度指標(生徒)】 副担任と担任が連携し、将来の進路目標を設定するための説明や指導が十分になされている。	進路を考える上で「総合的な学習の時間」が参考になったと思う生徒の割合が A　90%以上である。 B　80%以上である。 C　70%以上である。 D　70%未満である。	「参考になっている」「少し参考になっている」の割合が 1年74．8% 2年68．9% 平均71．9% (第2回学習実態調査)	2年生の数値にはほとんど変動はないが、1年生で大幅な落ち込みが見られた。入学してくる学力層が変化していることもあり、生徒、保護者のニーズを踏まえた上で、進路意識を高めていく必要がある。現在の取り組みに改善を加え、より高い志を持つように促していきたい。	昨年度は「参考になっている」「少し参考になっている」の割合が 1年　84．0% 2年　69．7% 平均　76．9% (第2回学習実態調査)
	③ 個人面談を通して生徒理解に努め、生徒個々に応じた進路指導を実践し、3年間を見通した進路指導体制の充実に資する。	進路指導課 学年団	3年間を見通した進路指導体制の充実を図るべく、生徒個々の志望や家庭状況等も勘案しながら、ホームルームや総合学習時の進路学習や進路志望調査、模試結果等を参考資料として、昼食時間や放課後等に個人面談を実施している。	【満足度指標(生徒)】 担任との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であると考えている。	進路を考える上で担任との面談が参考になったと思う生徒の割合が A　95%以上である。 B　90%以上である。 C　85%以上である。 D　85%未満である。	「担任との面談が役立っている」「もっと面談したい」の割合が 1年93．6% 2年93．3% 3年81．3% 平均89．3%	3年生の数値に落ち込みが見られるものの、多くの生徒が担任との面談に意義を見い出していることが明らかである。生徒が求めているのは勉強法についての実践的具体的な助言だと思われるので、効果的な助言法について学年団との意見交換と意思疎通を今後も図って行きたい。	昨年度は「担任との面談が役立っている」「もっと面談したい」の割合が 1年 94.3%　2年 87.7% 3年 95.2% 平均　90．6% (第2回学習実態調査)
	④ 大学合格者数の数値目標を達成する。	進路指導課 3年学年団 教務課 各教科	国公立大学の合格者数を2年ぶりに50台に戻すことはできたが、国立大学の合格校は5校のみであった。金沢大学の合格者数は3年ぶりに二桁に回復させることができた。	【成果指標】 国公立大学合格者数が本校の進路指導の評価の一つとなっている。	国公立大学合格者数が A　60人以上である。 B　50人以上である。 C　40人以上である。 D　40人未満である。	国公立大学に41名(現役39＋浪人2)が合格した。(卒業生は前年度より1クラス減)	国公立大学志望者に対し教科バランスの取れた学力養成を図ってきたが、センター試験で苦戦したことに加え、基幹となる二次科目においても十分に学力を伸ばすことができなかった。何が足りなかったのか、挽回を図るために何をすべきなのか、生徒が行うべきことと教員が行うべきことに分けてしっかり精査反省を行い、本校進学指導の立て直しに取り組みたい。	昨年度実績は50名(現役48＋浪人2)。
				【成果指標】 地元の金沢大学合格者数が本校の進路指導の評価の一つとなっている。	金沢大学合格者数が A　15人以上である。 B　10人以上である。 C　5人以上である。 D　5人未満である。	金沢大学合格者数は3名(現役のみ)に留まった。	上記の要因により、金沢大学出願者も合格者も大幅減となってしまった。本校が地域・保護者からず期待されるのは金沢大学への合格・進学実績であることを思えば、今春の入試結果は深刻である。30年度は志望者のグルーピング指導と金沢大学二次試験問題分析に基づく個別添削指導などを、早い時期から行う必要がある。	昨年度実績は11名(現役のみ)。
学校関係者評価委員会評価		・近年の実績が気になる。今以上に早期に生徒が目的を持てるようにして欲しい。生徒に刺激を与えるような講師を選定しての講演や、卒業生や先輩の成功談などもよいのではないか。						
上記評価をうけた今後の改善策		・3年間を見通した進路指導体制を確立し、有意義な講演や試みを検討・実施などして、低学年指導を充実させていきたい。						

重点目標	具体的取り組み	主担当	現　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善対策等)	備考
2 授業と家庭学習とにより基礎・基本となる学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と実践を進める。	① 中高交流研究授業、探究スキル育成プロジェクト、校内公開授業など諸研究授業の実践・参観及び研究協議会を通じて、教科指導法等の技能を高め、生徒の思考力の向上に努める。	教務課 各教科	昨年度は80%程度の達成率で、ほぼ全ての授業で生徒が発展的な内容に触れ、より多く考える機会が得られたと答えたが、生徒が主体的にさらに深く学ぼうとしているかを問う、具体的なアンケート項目に改善したい。	【満足度指標(生徒)】 授業の中で、その内容をもとに、さらに深く自ら考える機会をもち、学習に対する大きな刺激を与えてくれる。	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激をが得られたという生徒の割合が A　75%以上である。 B　65%以上である。 C　55%以上である。 D　55%未満である。	平成29年度 国語82% 地公77% 数学79% 理科76% 保体83% 英語85% 平均80%	昨年度に続き、各教科で意識的に「発展」内容に踏み込む場面を多く設定してもらった。外部専門家を活用した最先端分野を学ぶ授業なども2年目となり、特進クラスだけでなく、普通クラスも巻き込んでの、より前向きな取り組みとなっている。ぜひ来年も改善に努めたい。	今年度新規 (アンケートの項目変更)
	② 家庭学習時間調査を通じて、生徒の学習状況を把握するとともに、学年団と連携して各種課題提出の徹底を図ることにより、家庭学習習慣の確立に努める。	教務課 各学年団 各教科	学年平均は、3学年とも目標の学習時間を達成しているが、達成している生徒の割合が低い。生徒一人ひとりへの声かけを欠かさず、重点的に取り組みたい。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時間を1年生120分、2年生120分、3年生220分とする。	目標時間を達成している生徒の割合が A　70%以上である。 B　60%以上である。 C　50%以上である。 D　50%未満である。	平成29年度 1年　63% 2年　67% 3年　45% 平均　58%	昨年度に続き、学習実態調査などからも家庭での学習時間の減少が顕著に現れている。具体的な指示を与えつつも、生徒自らが必要性を感じ、一人ひとりが自主的に学習に取り組めるように、いろいろな働きかけが必要である。	平成28年度 1年　53% 2年　62% 3年　51% 平均　55%
			全体的に学期中の学習時間が不足しているが、休業中には更に少なくなる傾向がある。休業中でも意欲を喚起でき、継続できる取り組みが必要である。	【努力指標】 夏季休業中(7・8月)の学習時間を1学期(4～6月)と同程度(90%以上)に維持する。	1学期と同程度の生徒の割合が A　70%以上である。 B　60%以上である。 C　50%以上である。 D　50%未満である。	平成29年度 1年　22% 2年　8% 3年　91% 平均　41%	夏季休業中における適切な学習課題の設定に十分配慮し、部活動とも両立が可能な時間設定を生徒とともに考える必要がある。努力指標についても、現状を考慮しながら再考することも考えたい。	平成28年度 1年　40% 2年　30% 3年　99% 平均　56%
	③ 土曜補習(Sゼミ)を効果的に実施し、学習における基礎基本の定着を図る。	教務課 各教科	土曜補習(Sゼミ)については、「やらされている感」をもつ生徒が多い。生徒の多様な進路目標を念頭に置いて、時間割等を検討する必要がある。	【満足度指標(生徒)】 土曜補習(Sゼミ)は学習意欲の喚起、基礎学力の養成に効果があると考えている。	効果があると考えている生徒の割合が A　80%以上である。 B　60%以上である。 C　40%以上である。 D　40%未満である。	平成29年度 1年　71% 2年　70% 平均　71%	昨年同様「やらされている」感が強い生徒が多いが、職員全体が土曜補習に対して、その内容を年度ごとに見直し、改善するように取り組んでいる。数値的に大きな変化はないが、継続し有効な手段を模索したい。	平成28年度 1年　68% 2年　74% 平均　71%
学校関係者評価委員会評価		・学校側の進めている取り組みについてよくわかった。生徒の意欲と実力を高めるための工夫や改善を、さらに進めて欲しい。						
上記評価をうけた今後の改善策		・主体的対話的で深い学びを実現するため、授業改善に継続して取り組み、ICT機器の活用や習熟度別授業が実のあるものとなるようさらに改善を図っていく。						

重点目標	具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善対策等)	備考
3 文武両道を目指して部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域行事やボランティア活動への積極的参加に努め、明るく活力ある学校づくりを推進する。	① 部活動の内容を充実させ、活性化を図り、文武両道を目指す。	生徒会 指導課	1年生は全員部活動に加入しているが、活動に満足している生徒は70%にとどまっている。時間が経つに従って低下傾向にある。より満足度を高める工夫が必要である。	【成果指標】 1年生の部活動に対する満足度を高める。	満足している1年生の割合が A 80%以上である。 B 60%以上である。 C 40%以上である。 D 40%未満である。	「充実感を感じている。」 56．8% 第2回学習実態等調査	「充実感を感じている」と回答した生徒の割合は、6月の調査では77.7%(H28 81.7%)、12月では56.8%(H28 70.2%)と、2学期に大きく低下している。2学期に入り学業との両立に苦労する生徒が多くなったと考えられる。総体後、新人大会に向けての取り組みに改善・工夫が必要である。	平成28年度 「充実感を感じている。」 70．2% (第2回学習実態等調査)
	② 運動部の競技力向上を図る。	生徒会 指導課	平成26年度総体総合順位は22位。 平成27年度総体総合順位は28位。 平成28年度総体総合順位は33位。	【成果指標】 県高校総体で総合順位25位以内をめざす。	県高校総体順位が A 25位以上である。 B 26位～30位である。 C 31位～35位である。 D 36位以下である。	平成29年度 総合25位 男子30位 女子14位	体操部(女子団体・個人)がインターハイに出場。弓道部(女子団体)が全国選抜大会出場(2年連続)。弓道部(男子個人)が国体に出場。放送部がNHK杯全国大会(3部門)に出場した。総体順位は昨年度を上回ったが、男子及び団体競技の強化が必要であり、限られた練習時間を効果的に活用する指導が必要である。	平成28年度　総合33位 男子42位 女子22位 平成27年度総合28位 平成26年度総合22位
	③ 部活動が地域や中学校との連携を図り、地域に愛される学校づくりを目指す。	生徒会 指導課	多くのの部活動が地域のボランティア活動や中学校との合同練習を行っているが、地域や中学校に活動が十分に認知されていないのが現状である。	【成果指標】 全30の部活動が年1回以上、地域や中学校と連携し、活動を行う。	地域や中学校と連携し、活動を行った部活動が A 25以上である。 B 20以上である。 C 15以上である。 D 10未満である。	24の部活動が地域または中学校と連携して活動した。	多くの部が地域・中学校と連携した活動を行い、本校の部活動をアピールすることができた。しかし、連携の方法や内容については、まだまだ改善の余地はあると思われるので、来年度以降も継続して取り組んでいきたい。	平成28年度 24の部活動が地域または中学校と連携して活動した。
	④ 郷土独自の歴史や文化を知り、郷土に対する親しみや誇りを持つよう、地域探訪を計画・実施する。	総務課 1年学年団	郷土の伝統文化に触れる機会が少ないために、それらに対する興味・関心が乏しい。	【満足度指標(生徒)】 設定されたコースを興味・関心をもって巡ることができる。	参加してよかったと感じる生徒が A 90%以上である。 B 75%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	「参加して良かった」 73% 生徒のアンケート結果	今年度は見学地の見直しなど満足度指数の向上を目指したが、期待したほど数値は伸びなかった。実施日の天候が、昨年度ほどではないが、風雨であったことが原因と考えられる。	昨年度の地域探訪は 「参加して良かった」 67% 生徒のアンケート結果
				【満足度指標(生徒)】 郷土の歴史・文化について理解が深まり、郷土に愛着を感じる。	郷土に対する理解がかなり深まったとする生徒が A 40%以上である。 B 30%以上である。 C 20%以上である。 D 20%未満である。	理解が「かなり深まった」: 48% 生徒のアンケート結果	前年度の申し送りをうけ、事前指導を行ったことや情報の授業でも事・事後指導を行ったこと、見学地でボランティアガイドによる説明をうけることなどで数値が向上した。	昨年度は 理解が「かなり深まった」: 24% 生徒のアンケート結果
	⑤ 山林ボランティアや地域清掃活動など、地域に貢献する取り組みに積極的に参加する。	総務課 学年団	学校全体としては、さまざまな取り組みを行っているが、主体的にボランティアに取り組もうとする生徒の割合は多いとは言えない。	【成果指標】 さまざまな地域ボランティア活動に積極的に参加する。	ボランティア活動に参加した生徒の延べ人数が A 450人以上である。 B 350人以上である。 C 300人以上である。 D 300人未満である。	6月と9月の地域清掃ボランティアに2年学年が参加。10月の山林ボランティアに22名参加。	例年2回行っている山林ボランティアであるが、今年度は悪天候で第1回が中止であったこと、またボランティア部が1年生で募集停止、2年生は行事と重なり参加できないないなど参加人数が減少した。	6月9月の地域清掃ボランティアに2年学年が参加。 山林ボランティア、7月(56名)10月(59名)参加。
学校関係者評価委員会評価	・文武両道は是非しっかり維持して欲しい。地域の活動やボランティア活動を通して、地域とのつながりをさらに深めて欲しい。							
上記評価をうけた今後の改善策	・時間設定や学校行事の再考で、文武両道を後押しできるようにする。地域とのつながりやボランティア活動についても、積極的に検討していく。							

	具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善対策等)	備考
4 挨拶の励行や交通ルールの遵守などの指導を丁寧に行い、基本的生活習慣の確立と規範意識・マナー意識の高揚を図る。	① 登校指導や挨拶運動などを通して、挨拶の励行及び正しい制服の着こなしと規範意識、マナー意識の高揚を図る。	生活指導課 学年団	交通マナーやJR乗車マナー、服装容儀、挨拶において年々向上していると感じられるが、さらなる指導の必要性が感じられる。	【満足度指標(保護者)】 規範意識、マナー意識が向上したと感じる。	向上したと感じている保護者が A 90%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	67% 規範意識、マナー意識が向上したと感じる。 【保護者アンケート結果】	「マナーや服装容儀、生活指導が適切になされている」という観点では85．4%であったのに対し、向上したと感じている保護者が少ない。校外での規範意識、マナーが低いと判断されたものだと思われる。校外での身だしなみや交通マナー・JR乗車マナーなど、一層の指導が必要である。	「規範意識、マナー意識が向上したと感じる」 69% 保護者アンケート結果
	② 遅刻の管理をし、基本的生活習慣の確立をさらに推し進め、学習環境を充実させる。	生活指導課 学年団	昨年度登校時間を8時15分とし、朝学習に遅れないよう遅刻指導を行った。アバウトな5分間が無くなり、遅刻数は増えたが朝学習に遅れる生徒は減少した。引き続き遅刻指導を徹底し基本的生活習慣を	【努力指標】 1日の平均遅刻者数が1人以下になることを目指す。	全体の1日平均の遅刻者数が A 0．5人以下である。 B 1人以下である。 C 3人以下である。 D 3人を超える。	1日平均　1．45人 1学期1日平均　1．07人 2学期1日平均　1．78人 3学期1日平均　2．81人	昨年度に比べ遅刻者は増加した。遅刻者総数213名のうち1年52名，2年74名，3年87名であった。 同じ生徒が遅刻を繰り返すケースが多い。粘り強く指導を継続する事としたい。冬場の遅刻数が多くなっていることも課題である。、 基本的生活習慣の確立が学校生活の落ち着きや学力向上につながると考えられるので継続して指導していきたい。	平成23年度　2．8人 平成24年度　3．3人 平成25年度　1．3人 平成26年度　0．7人 平成27年度　0．5人 平成28年度　1．1人
	③ いじめのない学校づくりをめざし、全職員の共通理解のもとで、いじめは絶対にダメであるという指導を徹底して行う。	生活指導課 学年団	日常の指導やいじめ防止のための講演会などの取り組みをすすめるとともに、アンケートや生徒との面談などを通じて情報収集と指導を図っている。	【努力指標】 課題のある生徒への対処で、学年団や教育相談、生徒指導などが十分に連携している。	連携しているとする教員の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	課題のある生徒への対処で、学年団や教育相談、生徒指導などが十分に連携している。 学校自己評価(職員) 85%	いじめや問題行動、不登校など様々な課題に対して、担当教員だけでなく各課や学年団が連携して対処していくことが不可欠であると考えられる。今年度は85%と目標を達成したが、少しでも100パーセントに近づけることが求められる。課題のある生徒を見過ごさず、常に情報を共有して対処するためにも、連携の意識を高め最善の対処をしていきたい。	今年度新規
学校関係者評価委員会評価	・遅刻の増加は気になるが、挨拶はかなり改善してきているように感じる。今後もしっかりと指導していって欲しい。							
上記評価をうけた今後の改善策	・遅刻指導についても挨拶の指導についても、終わりのないものであり、今後も継続的に指導して改善を図っていく。							